

「布目瓦（ぬのめがわら）を拾いにいかないか？」

あの日、つうくんは僕を誘った。

北野小学校長 丹羽 郁人

つうくんとは、小学校五年生で初めて同じクラスになった。何事にも積極的に行動力溢れるつうくんとはすぐに仲良しになった。

六年生で再び同じクラスになったぼくらは、もう親友と呼べるほど仲良くなっていた。ある春の朝、つうくんは言った。

「布目瓦（ぬのめがわら）を拾いにいかないか？」

「何だいそれは？」

「昔の瓦には、布目のあとがついているんだ。北野にある寺のあとには、たくさん布目瓦が落ちているらしいぞ。」

次の日曜日、ぼくらは自転車で北野廃寺へ向かった。市役所の近くに住んでいるぼくとつうくん。六年生としては大冒険だ。しかし、つうくんはペダルを力強く漕ぎ、どんどん先を行く。ついていくのがやっとだった。訪れたその場所は、まだそのころはしっかりとした整備もされていなく、荒れ果てた空き地状態だった。ぼくらは、そこに落ちている布目瓦を、宝物を扱うかのように大切に拾った。

あの頃のつうくんの行動力がぼくに与えた影響力は大きい。

こんなつうくんみたいになってほしい。こんなつうくんみたいな子を育てたい。疑問に思ったら、自らの足で追究する子。指示を待っているのではなく、自らの足で動き始める子。そして何より、ふるさとを大切に思い、ふるさとを誇りに思う子を育てたい。ぼくらの行動力の基盤となったとも言える北野廃寺は、ここ「北野」にある。

次の日、つうくんは僕を誘う。

「岐阜の瑞浪というところに、化石を拾いに行かないか？ウミユリっていう化石がいっぱいあるみたいだぜ。」

次の日曜日、生意気盛りの二人の冒険家は、再び旅に出た。



北野廃寺想像図